

■ 瑛 九 《遊園地》

一目惚れ

この瑛九の《遊園地》は一五〇一六年前、銀座のある画廊のショーウィンドーに飾られており、たまたま通りがかった私が、一目惚れをしてしまった作品です。それは、私が今迄見たことのないようなクレーを思わせる洒落た絵でした。

その数日後にこの作品を見に行ったのですが、山口長男の油彩《鮎》という作品（八号）にも出会うことになるのです。

それは長男独特の赤茶色に黒い点が横に数点打ってあるシンプルな作品でした。気がついてみると、あまり金も無いのに二点とも購入する結果になっていたのです。

中村儀介（千葉県木更津市）

瑛 九 《遊園地》

パステル、油彩・キャンバス 65.0 × 50.0cm 1957年



瑛 九（えいきゅう／1911-1960年）

宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的・抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。51年デモクラート美術家協会結成。創造美育協会に参加。60年没。48歳。

■ 安藤信哉 《対話》

梅野さんと出会って

これは、梅野隆さんの藝林時代に梅野さんより、安藤信哉の作品を四点購入したもののうちのひとつで気に入っている作品であります。パリの公園での井戸端会議だと思います。

この作品の連作が、梅野記念絵画館にあると記憶しています。ここで、梅野さんについて、少しお話しさせて戴きたく思います。梅野さんがブリヂストンを退社して、ブリヂストン美術館のすぐ近くの小さなテナント（藝林ではなく）で、「古賀春江の小品展（水彩）」をされている時、ふらーっとそこに足を踏み入れたのが、梅野さんとの出会いでもあり、私の絵の収集の始まりでもありました。

梅野さんは、感性、知識、情熱、三拍子持ち合わせ、又そのひとつひとつの質の高さ、深みが人を引き寄せ、なかでも絵画にかける情熱は言葉に表されない程、スゴイものがありました。

又、藝林にはいろいろコレクターや美術関係者が出入りしていましたが、私もその中の一人でありました。梅野さんがいなくなったことは、私にとっても、美術業界にとりましても、とても寂しいことだと思っております。

梅野さんはよく、ご自分のことを「野人」と言っておられました。彼の様な美の達人が今後出てくるのか疑問に思っています。私も、梅野さんの芸術に懸ける情熱を大事にし、その火を消さないよう、コレクターとして、わたくし美術館の痩せオーナーとして、頑張っていくつもりであります。

中村儀介（千葉県木更津市）

安藤信哉 《対話》

油彩・キャンパス 102.0 × 73.0cm 1962年



安藤信哉（あんどう・のぶや／1897-1983年）
千葉県生れ。本郷洋画研究所、太平洋画会研究所、川端画学校に学ぶ。38年新文展で特選。40年東京聾啞学校で教える。41年新文展無鑑査。58年日展会員。73年ヘレン・ケラー賞。74年日展参与。日本水彩画会会員。83年没。85歳。

■ 小山田二郎 《人間形態》

小山田二郎の《鳥女》は人間変革の象徴 瀧口修造の存在は日本の現代美術の変革を紡ぐ糸

「小山田二郎の鳥女を出品、何気なくそう答えてしまったあとで、改めて額の裏を見て「人間の形態」というテーマであることに気がつく。

小山田の描くテーマのメインに位置する《鳥女》、なるほど小山田の描いた《鳥女》は「人間の形態」の証であり象徴、《鳥女》と名付けられた作品のそれぞれに移ろいゆく、いやもしかしたら定まった？人間の業が塗り込められている。

「タケミヤ画廊とは、シユールレアリストであり詩人・美術評論家の瀧口修造がブレインになっていた、戦後の現代美術をリードしていく伝説的な画廊で、個展形式の展覧会に先鞭をつけたのもここだった。この日、奇しくも小山田二郎が第一回個展を開いていた。しかも初日。瀧口修造がパンフの切手代を負担し、美術の仲間が額縁を造るといふ手作りの個展であった（AREEの中の「小山田チカエさんに聞く」から転記）。この日は、足跡から辿ると一九五二年（昭和二十七年）小山田三八歳初個展の初日である。

戦後日本の現代美術スタートの雰囲気映し出されているような風景が目につく。過日、千葉市美術館では「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展が開催された（二〇一一年一月二二日〜二〇一二年一月二九日）。今世紀というスパンで現代美術に目を向けた時、世界ではデュシャンが祖のように言われているが、瀧口修造という《美術への業》を持った一人の人間を介して日本の現代美術の変革の糸が紡がれている姿が見えてきて改めて興味深い。 木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

小山田二郎 《人間形態》
水彩・紙 55.0 × 37.0cm 制作年不詳



小山田二郎（おやまだ・じろう／1914-1991年）
中国生れ。帝国美術学校図案科、西洋画科中退。
独立展、美術文化協会展に出品。自由美術家協
会会員。日本国際美術展、現代日本美術展等
に出品。1957年サンパウロ・ビエンナーレに
出品。91年没。77歳。

■ 小泉 清 《裸婦》

「ほとんど知られていない作家たち」だとしても忘れ去ってはいけない人たちの方が大切

「一般的にはほとんど知られていない画家ですが……」という書き出しで画家「小泉清」を紹介している一文がある。今回、小泉清を含め、他に小山田二郎、小堀四郎、柳原義達（彫刻）、恩地孝四郎作品を我々的には紹介させていた。だくことにした。みな一般的にはほとんど知られていない……という作家に当たる。今、ピカソ、梅原龍三郎、横山大観でさえ、教科書では見ただけれど、という世代が美術界を席巻する時代、やむなしかとも思うが淋しい。今回の書籍で紹介される作品（作家）の大半が「知られていないが、忘れ去ってはいけない」ものばかりであり、作家、作品とともに、作品が描かれた時代の背景をも含めて今後の顕彰につながることを期待している。

小泉清は一九〇〇年、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の三男として生まれた。東京美術学校に進みながら、画家としてデビューするのは四六歳、突然病没した妻のあとを追うようにガス自殺によって命を絶つのが六一歳、何と激しい人生か。絵を描いた一六年という短い時間の中で、父ハーンという存在に影響を受け続けながら苦悶の中で描いた作品の多くは、その内面を叩きつけたような厚塗りで荒々しいタッチのものが目立つ。この作品もその代表的なものだが、ガラスの裏から見えてくる青や赤、黄の色は、その激しさとは裏腹に透き通って美しい。

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

小泉 清《裸婦》

油彩・ガラス 17.5 × 27.5cm 制作年不詳



小泉 清（こいずみ・きよし／1900-1962年）
東京生れ。父は小泉八雲。東京美術学校西洋画科中退。里見勝蔵のフォーヴィスムに影響を受ける。1946年新興日本美術展で読売賞。47年初個展。48年一燈美術賞。54年国画会会員。銀座フォルム画廊で個展。自死。61歳。

■ 小泉 清 《自画像》

哀愁を湛えた眼差しが私を離さない！

大阪勤務の時は仏像も好きで良く京都を訪れていました。その都度、京都市美術館近くのH画廊に通いHさんの薫陶を受けました。私は日本で有数の画廊主に手ほどきを受けたのです。

ある日、Hさんよりスタンプリアーを薦められました。最後にはこの画廊に行きなさいとアドバイスがあり、京都市庁舎の前のS画廊を訪れました。この作品との出会いがあったのです。なんと一時間近くもこの作品の前に立ち尽くしていました。哀愁を湛えた眼差しが私を離さないのです。白目が私を睨み、青い瞳が私を絵の中に引き込む。迫力ある自画像です。見かねた京美人のS画廊主が私の目を見て「貴方にこの作品を上げます。私の言う値で入札しなさい」と提示された価格は、私の思っていた価格の半値でした。小泉清は、ラフカディオ・ハーン、日本名小泉八雲の三男です。日記が残っています。「西欧的追求か東洋的解脱感か、俺の血管の中には西欧と東洋の血が闘っている。自分のなかで対立する西洋的なものと東洋的なものをどう解決していくか」。小泉清は、昭和三十七年に自死しました。

さて、自死の理由は妻の死に加え、自身の絵の独自性との葛藤、つまり里見勝蔵の影響（近くに住む峰村リツ子さんが語っていたことが伝えられています）と西欧と東洋の血のはざ間にあったようです。遺書には「血が複雑すぎたのだろう」と書かれていました。

堀良慶（千葉県柏市）

小泉 清 《自画像》

油彩・ボード 28.0 × 19.0cm 制作年不詳



小泉 清（こいずみ・きよし／1900-1962年）
東京生れ。父は小泉八雲。東京美術学校西洋画科中退。里見勝蔵のフォーヴィスムに影響を受ける。1946年新興日本美術展で読売賞。47年初個展。48年一燈美術賞。54年国画会会員。銀座フォルム画廊で個展。自死。61歳。

■三上 誠《作品》

観照の至福

「主音とは定義しようとするれば価値がなくなってしまいが、それは光である。科学の探求の喜びはこの〈光〉に接する喜びであって、〈知る〉幸福は、我々の地上の旅の終点にある。〈観照の至福〉を前以て味わうことである」。(一九六六年、三上誠)

私はこの作品の赤が気になります。結核の病は時に血液が熱く燃える時がある。体中が熱く感じるのです。そして性欲も高まる。この赤は血液の生の太陽の色だと思います。

赤は他に生、生命、火、情熱、太陽をイメージします。乾昌子との新婚生活を経て五年後に生れた作品です。結婚後のカラーージュにも赤が現れています。結婚後の五、六年間に赤が多いようです。

私はこの赤を素直に「血液」そして「生への希望」と見ても良いと思っています。

下の黄土色の帯には光が当たっている。ここは浜辺と見る方が良いでしょうね。浜辺にある円の中に描かれたものは何なのでしょう。魚の頭、貝の中身、真珠、女性の横顔？ 人工物？ 生の痕跡を残した化石？ いずれにも印象的な目があるように見えます。下部のこげ茶色の帯は大地でしょうか。

ちょっと大きですが、夕日は西方浄土を示すには、少し激しい業火にも見える。三上誠の人生を残された略歴や画集から顧みると実に大変な人生を送っていました。

堀良慶（千葉県柏市）

三上 誠《作品》

ミクストメディア・紙 91.0 × 110.0cm 1965年頃



三上 誠 (みかみ・まこと / 1919-1972年)

大阪市生れ。京都市立絵画専門学校を卒業。1949年星野真吾らとパンリアル美術協会を結成。51年パンリアル美術協会会長。日本画、カラーージュを制作。52年結核、手術。福井大学学芸部非常勤講師。福井県文化芸術賞。72年没。52歳。

■ 下村良之介 《作品》

まさに逞しい異空間の創造！

私は、サラリーマン時代に大阪勤務が二度あります。関西銘柄が専門という訳ではありませんが、東京で質の高い関西作家の作品が放出されたり、不当に安く放置されているときには有り難く頂戴するようにしています。

この作品が下村良之介の代表作であるかの確認の為、二〇〇八年八月、京都国立近代美術館で開催されていた没後一〇年、下村良之介展を見ってきました。下村良之介の異空間をたっぷり楽しんできました。正にたくましく創造活動を見せてくれました。やはり一九六〇年代に創った紙粘土作品、天空を切っ裂いて翔ぶ鳥のシリーズが創造性ゆたかです。紙粘土作品は下村良之介の独自の表現世界を完成させた作品群です。下村良之介は生涯日本の前衛を突っ走った作家の一人です。

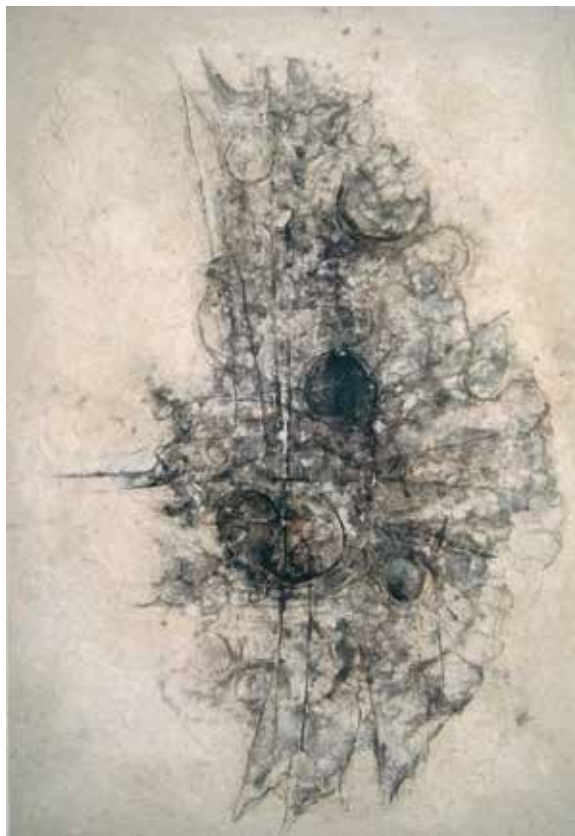
パンリアル美術協会は新たな日本画の表現を求め一九四九年、三上誠、星野真吾、不動茂弥、大野秀隆、下村良之介等一名によって設立されました。パンリアルは旧来の日本画の革新性を標榜し、因習打破をもくろみ、文字通りわが国で初めて実現した「前衛」活動とって過言ではありません。

ある識者が「神戸の具体より京都のパンリアルの方がレベルの高い前衛運動です」とキツパリ言われていたのが印象的です。精神的支柱であった三上誠が亡くなった後は下村良之介が指導的役割を果たしました。

堀良慶（千葉県柏市）

下村良之介 《作品》

淡彩、紙粘土・板 130.3 × 89.4cm 制作年不詳



下村良之介（しもむら・りょうのすけ/1923-1998年）
大阪市生れ。1943年京都市立絵画専門学校卒。
49年パンリアル美術協会会員、指導的役割を果たす。日本画、銅版画、彫刻、舞台美術を手がける。
61年丸善石油芸術奨励賞（留学賞）で渡欧。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。98年没。75歳。

■ 星野眞吾 《鋏と画鋏》

静謐な内面的世界を抜群の技法により表現

私が絵を収集しているのは、絵をじっくりながめ、その中に没入することによって得られるなんとも言えない心地よい世界があるからである。

だが、星野眞吾は既存の画壇の保守的な体質への反発から、前衛的な日本画に挑戦した画家であり、人の体に絵具を塗って画面に定着させる「人拓」シリーズなど、私の好みとしては、受け入れ難い作品を多く残している。

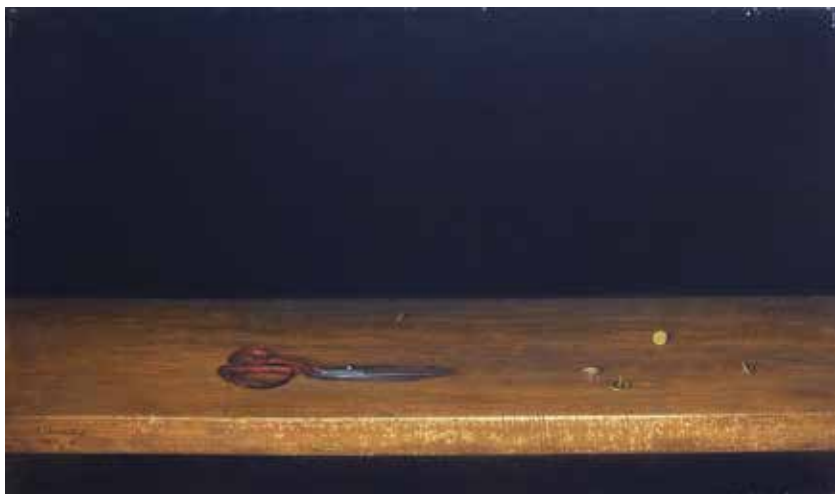
この《鋏と画鋏》も、真に迫った写実的な絵ではあるが、描かれているものは鋏と画鋏という鋭利な金属で危険な物であり、心が和むような作品ではない。

しかし、それでも私がこの絵に惹かれるのは、鋏と画鋏が置かれた木の板の温もり、背景の黒色の絶妙な美しさと単なる写実を超えた危うさ、儂^{はかな}さという目には見えない内面的世界が、抜群の日本画の技法によって表現されているからである。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

星野眞吾 《鋏と画鋏》

彩色紙本 23.5 × 40.5cm 1974年



星野眞吾（ほしの・しんご／1923-1997年）
豊川市生れ。日本画家。中村正義に会い、生涯の盟友となる。卓抜した技法の持ち主で、その質感と対象への肉薄は他の追随を許さない。三上誠とパンリアル美術協会を興し、絵画の革新を目指す。星野眞吾賞創設。愛知県で没。74歳。

■ 中村義夫 《早春薄暮》

天を突き破るはげ山の迫力と静けさ！

一九九三年、京都の京都市美術館近くにあるH画廊で「洋画家の夢・留学」展に滞欧作五二点が展示されました。その中で中村義夫の《サンジェルマン・アン・レイの冬》に出会いました。葉を落とした広葉樹の巨木が通りに三本立っていて、その間を二人の男女が寄り添うように歩いている図です。この絵だけ何故か美しく見えました。油絵を自分のモノにした作品です。静かなたはずまい、シックな黒、茶、黄土色が中心の色調です。美しい作品でした。

あれから一七年経って、ようやく東京神田「一画廊」で中村義夫の作品を求めることが出来ました。願いが叶ったのです。大阪市立美術館で行われた関西西洋画展覧会に特待出品された作品《早春薄暮》です。この作品は東京で求めることの出来る最後のチャンスだと思いました。天を突き破る如くはげ山の迫力が私を魅了します。戦後間もない頃の日本の山は禿山が多かったのです。懐かしくしかも静かです。中村義夫は再び本物だと思いました。

中村義夫は大正一〇年渡仏。アマン・ジャンに師事。小出楯重と交友。帰国後、浜田葆光、小見寺八山らと大阪美術研究所を設立。昭和初期、奈良高畑に転居。志賀直哉の文化人グループ高畑サロンのメンバーの一人となる。サロンのメンバーであった浜田葆光、若山為三、新井完、山下繁雄らと親交を深め活動した。その後、矢崎千代二らとともに関西パステル画会の指導にあたる。

堀良慶（千葉県柏市）

中村義夫 《早春薄暮》

油彩・キャンバス 55.0 × 66.0cm 制作年不詳



中村義夫（なかむら・よしお／1889-1957年）
兵庫県生れ。1905年松原三五郎に師事。17年東京美術学校卒。21～26年渡欧。アマン・ジャンに師事。サロン・ドートンヌに入選。大阪美術研究所を設立。志賀直哉らと交友。35年関西パステル画会を指導。57年没。68歳。

■ 網谷義郎 《二人》

精神価値の勝利と至福！

ここに挙げた作品は、出会いの瞬間で購入を決めたものです。自分の精神価値と市場価値とを天秤はかりにかけ精神価値が勝れば買う。このスタンスが無名作家に対しては快いものです。でも実は私には、この作品に何が描かれているのかが未だによく判りません。

この作品はその後、大川美術館で行われた網谷義郎展で兵庫県立美術館所蔵作品と共に一番目立つところに展示されました。私は代表作の一点に昇格したと密かに喜びました。

題名に「二人」とありますので無理して人間に見ようとしていますが、何か変なのです。不可解な作品です。私がジャズダンスを楽しんでいることもあり、この作品の二人が楽しそうにダンスをしているように見えてなりません。色彩は少ないのですが画面から優しさ、豊かさ、そして動きを感じます。

私は比較で作品を買う習性があります。過去のベスト10の作品より良い作品を数十点、数百点の中から一点選ぶ。この作品も六〇点ぐらいの売り立て展の中で一番良い作品で、しかも一番安価だった作品です。

堀良慶（千葉県柏市）

網谷義郎 《二人》

油彩・キャンパス 60.6 × 50.0cm 1967年



網谷義郎(あみたに・よしろう/1923-1982年)
兵庫県生れ。京都大学法学部卒。小磯良平に師事。1955年新制作展で新作家賞。59年新制作協会展で協会賞。60年新制作協会会員。大阪フォルム画廊、大阪梅田画廊等で個展。68年渡欧。79年水彩画集刊行。神戸で没。58歳。

■ 小出三郎 《人》

デッサンの生命は線の品性にある

この画にはサインはないが、そんなものはいらない。その美しさ、線の品性、モダンさ、それだけで十分である。この裸女には、自然ななかにも、清新なある妖しさが滲み出ている。「抱きしめたい」衝動にかられる。裸婦は風景や静物、人物とは比べられない程、描くのは難しいモチーフである。裸婦画ほど画家の技量や人間性を表出するものはない。ことにデッサンは、色彩といった余分なものがないだけに、それ等を直視できる。

デッサンの生命は線の品性にある。小出三郎の線にはそれがある。これは習練によってのみ培われるものではない。作家の生活環境や生きざまによって、自ずと描出されるものであり、作家独自の世界である。また、小出のデッサンには光や音を強く感じる。その上「女」を描かせれば、「女」自身に備わっている妖しい美しさを、自らの手によって創造している。だから、視覚的というよりも触覚的な女性のやわらかさが感じられる。それは、とりもなおさず、作家の想う「女」の姿を、自らの感情を移入しつつ、描出しているためで、この感情こそが作家の呼吸であり、それを感じるからこそ、真の美を見ることができるといえる。

この画は小さいが、大きな油彩に決して負けないすごさを持っており、私の愛する一点である。

三浦徹（兵庫県神戸市）

小出三郎 《人》

コンテ・紙 7.0 × 22.0cm 制作年不詳



部分



小出三郎（こいで・さぶろう／1908-1967年）
大阪生れ。信濃橋洋画研究所で小出櫛重、国枝金三、黒田重太郎に師事。1934年全関西展で全関西洋画協会賞。38年全関西洋画協会会員。独立美術協会賞。47年独立美術協会会員。汎美術家協会を結成。大阪で没。59歳。

■ 小出三郎 《箱根駒ヶ岳》

燻し銀で魅了する画家

小出三郎は大阪出身で、信濃橋洋画研究所で油彩技法を習得し、二九歳で独立展に入選し、独立賞も受けた。戦後は全関西美術協会を足場にして、関西の独立展の雄として活躍したため、関東では知る人は少ない。

しかし優れた描写力と繊細な感覚で描かれた《箱根駒ヶ岳》は中間色を薄塗りした山容が静かに安定した山塊を表現している。

真鶴の中川一政美術館の有名な箱根駒ヶ岳の明るい堂々とした山姿とは比較できないかも知れないが、渋い燻し銀の魅力がある。

小川榮吉（埼玉県川口市）

小出三郎 《箱根駒ヶ岳》
油彩・キャンバス 23.0 × 32.0cm 制作年不詳



小出三郎（こいで・さぶろう／1908-1967年）
大阪生れ。信濃橋洋画研究所で小出櫛重、国枝金三、黒田重太郎に師事。1934年全関西展で全関西洋画協会賞。38年全関西洋画協会会員。独立美術協会賞。47年独立美術協会会員。汎美術家協会を結成。大阪で没。59歳。

■ 喜多村知 《海近く》

透明な色彩を採るカラリスト

この絵は額裏に淀画廊のシールが貼ってあり、前の所蔵者が大事にしていたことがわかる程保存が良い。伝え聞いたところでは喜多村知の遺族が本図を買い戻したいと言っているそうだ。御存知の洲之内徹は、喜多村知の絵は物の本質を見て描いているので、絵に力がある。それが見る人に迫力となってせまって来るから、観者はそれに負けない位の力を持って向かわないとわからないことになると言っている。

天才的なカラリストといわれた喜多村知の清々しい透明な色彩はこの人の純粋なエネルギーのほとばしりなのだろうと思う。

小川榮吉（埼玉県川口市）

喜多村知 《海近く》

油彩・キャンバス 28.5 × 63.7cm 制作年不詳



喜多村知（きたむら・さとる／1907-1997年）
大連生れ。1921年京都府絵画専門学校入学。
26年川端画学校に学ぶ。30年帝展入選。41年
新文展で特選。50年三越、52年資生堂で個展。
63年渡欧。67年三越、76年現代画廊で個展。
95年下関市立美術館で個展。97年没。90歳。

■ 吉川三伸 《冬山》

引き付けられる何かを感じて入手

この冬山は雪があるわけではなく、山の形も通念とは異なる幾何学模様のような半具象の変った絵である。

それでも私を引き付ける何かを感じられたので、入手したのだが、作者は全く知らない人だった。

あとで調べて、三岸好太郎と福沢一郎に学び、独立展に入選したあと、美術文化協会、新象作家協会の会員としてシュールレアリスムの絵を描いていたことを知った。

小川榮吉（埼玉県川口市）

吉川三伸 《冬山》

油彩・キャンバス 45.0 × 52.0cm 制作年不詳



吉川三伸(よしかわ・さんしん/1911-1985年)
名古屋生れ。1934年三岸好太郎に師事。38年独立展入選。40～53年美術文化協会会員。53年新象作家協会設立会員、水彩連盟会員。戦中・戦後を通じて抽象画家として活躍。名古屋市で没。74歳。

■ 大塚 武 《ベニス》

自由に明るく「おじいちゃん先生」の真の姿

私の母校、瑞穂第一小学校の図工室にその画家はいた。底抜けに明るい「おじいちゃん先生」という印象が残っている。でも当時五〇歳代だったのだ。私が小学校六年の六月に眠ったまま亡くなっていたそうだ。その先生が画家としての顔を持っているなんて当時の私は思いもしなかった。

その昭島市にあったアトリエには学校の先生や子供たちが集まり画家に制作を習っていたという。「過労だったのでは」とは当時を知る先生のお話だ。

「やっと自分が納得できる絵がかけるようになった」という晩年が中心の画集の作品にはほとんどサインがない。それは未完成という意味ではない。先の先生のお話では「生涯一度の個展」の時に入れるつもりだったそうだ。そのため作者不詳として流れている作品もあるのではないかと。それを探し当てる方法はないだろうか？

朔日会でキャリアを積んでいたのに脱会した。「その訳はよくわからない」と友人の画家が綴っている。そんなことに捕らわれず子供たちを教えながら自由に進みたかったのだろうとその人生に思いを馳せる。この作品にはその吹っ切れた明るさがある。

「絵は下手にかけ」「姪御さんのお手紙から」、「混ぜろ、混ぜろ」(同級生の話)。私も「色の違いを出せ」と教えられたのを覚えている。記録・作品(奥様もほとんど所在がわからないとおっしゃっていた)はないけれど皆の思い出の中にいつまでも残る、そういう画家なのだと思います。

小山美枝(東京都西多摩郡瑞穂町)

大塚 武 《ベニス》

油彩・キャンバス 50.0 × 60.0cm 1975年頃



大塚 武 (おおつか・たけし / 1927-1979年)
栃木県生れ。1948年栃木県師範学校卒。50年上京、公立学校に勤務しながら油絵を学ぶ。57年朔日会同人、同会の展覧会で各賞を受賞。60年安井賞候補。69年朔日会退会。79年急性心不全で没。52歳。

■ 山本 弘 《赤鬼》

画家「山本弘」に〈泣き顔の鬼の絵かけて春隣り〉

私は、立春が近づく頃になるとこの山本弘の鬼の絵を掛けるのが数年来の習いになっており、去年はほとんど一年中、我家の狭い壁面を占領していました。

強烈な印象を残して世を去ったこの画家の心の中に住んでいたのであろうこの鬼は、よくみるとなぜか心弱そうで、自分の醜い姿に泣き出しそうな顔をしてこちらを見つめているのです。この鬼は又、誰の心の中にも住んでいる鬼を描いているようで、私の心の中にも居る鬼と兄弟の様にも思えるのです。

この絵は激しい筆使いにもかかわらず、見つめていると画中に引き込まれるような静寂感を漂わせていて画家が自分の心の中を深く見つめている思いが伝わってきます。この絵は山本弘の代表作の一つであると思います。私はもっと山本弘の事を知りたいと思いますし、皆様にも知って頂きたいと願っております。

福田豊万（千葉県市川市）

山本 弘 《赤鬼》

油彩・キャンパス 53.0 × 45.5cm 1978年



山本 弘（やまもと・ひろし/1930-1981年）
長野県生れ。1948年帝国美術学校中退。個展中心に発表。ヒロポン中毒となり、20代前半に飯田市に帰郷。アルコール中毒。自殺未遂を繰り返す。飯田市で個展活動。表現主義的な絵は売れず、極貧生活のなかで自死。51歳。

■ 菅 創吉 《出会い》

「出会い」に出会う

絵とのめぐり遭わせを考えてみるといろいろな偶然が重なりあつたのころと思わずにはいられません。もちろんいつも頭のなかに蒐集の意思がなければならぬという条件があるにせよ、今ここでその絵を見ることが出来ることは努力と出会いの結果でもあります。

この絵との出会いは、梅野隆氏の藝林月報二〇〇号記念のパーティーが東京銀座で盛大に開催されたその日でした。

大川美術館の創設者の大川栄一氏が挨拶の中でコレクターの存在の重要性を特に強調されて、多くの参列者の共感をよびました。私のような小コレクターも少しは美術普及に役立っていることを改めて認識させてもらったような気がしてとても快い思いをした記憶があります。

この日は他に銀座と団子坂でそれぞれ一点ずつ、素晴らしい絵とめぐりあい、忘れられない一日でした。

右側の人はひげをはやしている男性でしょうか。左側の人は女性でしょうか、男性でしょうか。どちらも中高年のようにも見えます。真中は女性でしょうか、何とも気をもませる出会いです。

野原宏（埼玉県久喜市）

菅 創吉 《出会い》

油彩・キャンバス 31.5 × 40.8cm 1977年



菅 創吉（すが・そうきち／1905-1982年）
姫路市生れ。絵は独学。カット、政治漫画、図案で生計をたて、戦後新聞挿絵で活躍。1960年現代画廊個展。63～72年渡米。ロス、シスコ、NYで個展。永住権取得。ユーモラスな形と禁欲的色彩の中に鋭く洞察深い認識を見せる。82年没。77歳。

■ 麻田 浩 《花》

美の神からのプレゼント

「NPO法人アートミュージアム・まど」代表の金井徳重氏の常設展示室で麻田浩の作品を見ました。何とも懐かしくもあり、自分好みの物でもありました。旧友にあったような気がしました。

JAAオークションで麻田浩の作品が三点出品されていて、それぞれの作品は独特な雰囲気での陳列作品を圧倒しているように私には思われ、強く惹かれて、まとめて落札しました。入手出来て大喜びしたことが強く印象に残っています。

二〇〇七年七月、京都国立近代美術館で没後一〇年の麻田浩展が開催されました。同じ作品がエッチングの代表作として一番目立つところに展示されているのを見て、私にも美の神からのプレゼントがあったことを確認できました。二〇〇八年七月、東京オペラシティアートギャラリーでの麻田浩展にもこの京都国立近代美術館所蔵の作品が展示されていたことからしても、国内にある作品は少ないのかもしれませんが。

「自分の目を信じよう」。誰にも何にも言わせない、そんな絵の一枚です。

野原宏（埼玉県久喜市）

麻田 浩 《花》

エッチング・紙 49.8 × 39.3cm 1976年



麻田 浩（あさだ・ひろし／1931-1997年）
京都市生れ。1955年同志社大学卒。68年新制作協会会員。京展須田賞。71年渡仏。プリ・ナショナル賞受賞。カンヌ国際版画芸術ビエンナーレ第1位受賞等多数。細密な洋画を制作し、銅版画家としても活躍。京都府文化功労賞。自死。65歳。

■ 麻田 浩 《物たちのおもい》

終末を予告する原風景

この3・11の東日本大震災、福島原発事故から時間が経つにつれ、頭に浮かんで離れない画がある。麻田浩のあの泥沼の寂寥とした世紀末のような五〇〇号の大画面《地・洪水のあと》（京都国立近代美術館蔵）の作品だ。この作品を描いたのは一九八五年である。体調を崩しフランスより帰国。長期間にわたるパリ生活に一区切りをつけ、京都のアトリエで闘病生活を続ける中、五〇〇号の超大作を集大成として描き残しておこうと決意する。

麻田が幼少から心惹かれた原風景の一つは、創世紀のノアの大洪水物語に根ざすという。世界の創世と終末にかかわるイメージの中にそのもろもろのオブジェたちが浮遊する。ここに掲げた《物たちのおもい》も、集大成とした超大作《地・洪水のあと》に登場する数々のオブジェと同じで、茶褐色の画面に不気味な煙りが流れ、朽ちた枯れ木／ちぎれた布／剥がれた紙きれ／紐やロープ／鳥の羽根や卵／蝶やいくつもの水滴／建造物の壊れた木材／動物の骨や石などである。

麻田の扱う素材や題材は、非情なガラクタである。彼は現代社会と人間のおかれている不安、危機的状況を暗示し、警告、予感していたのだろうか？

一九九七年、麻田が自らの命を絶ったのは京都市龍安寺のアトリエであった。

金井徳重（長野県中野市）

麻田 浩 《物たちのおもい》
油彩・キャンバス 65.0 × 100.0cm 1983年



麻田 浩（あさだ・ひろし／1931-1997年）
京都市生れ。1955年同志社大学卒。68年新制作協会会員。京展須田賞。71年渡仏。プリ・ナショナル賞受賞。カンヌ国際版画芸術ビエンナーレ第1位受賞等多数。細密な洋画を制作し、銅版画家としても活躍。京都府文化功労賞。自死。65歳。

奥村光正 《コルシカ風景》

信州安曇野の色

この《コルシカ風景》作品には一寸したエピソードがある。

二〇〇〇年七月「奥村光正展」が日動画廊で開催された。その折、《どうもろこしと貝の静物》という作品もすばらしかった。どちらを買おうか迷ったが、結局《コルシカ風景》を購入した。その後、日動画廊の社員の話だが、最終日に脇田和先生が画廊を訪れ、この《コルシカ風景》の画を写真に撮りたいということで、翌日プロのカメラマンを連れて撮影されたという。後日大きな写真を送っていただいた。この《コルシカ風景》は、昭和五五年第一九回国際形象展に出品した作品である。

奥村光正は無類のカラーリストである。その洗練された色彩は、パリにアトリエを構えて二五年、エコール・ド・パリの中から生まれたものではない。信州安曇野の澄んだ透明な空間から生まれた天性のものだろう。

詩人・松永伍一は、奥村光正画集で次のように述べている。「具象でありながらその奥に潜む未知なるものを彼は追っていたにちがいない。つまり、日常の現実感からメタフィジカルな領域へと守備範囲を拡げることによって、表より裏で感じさせる特技を、画家はそれを画面の裏に秘匿しつくすマジックを体得していた。」

平成九年、奥村はパリで他界。五五歳であった。

金井徳重（長野県中野市）

奥村光正 《コルシカ風景》
油彩・キャンパス 80.0 × 80.0cm 1980年



奥村光正(おくむら・みつまさ/1942-1997年)
長野県生れ。1968年新制作協会展で新作家賞。69年東京藝術大学大学院油画科を修了。72年渡仏。78年昭和会賞。国際形象展、安井賞展に出品、主に日動画廊で個展を開催。87年巴東会展の結成に参加。パリで没。55歳。

■ 三岸黄太郎 《谷あい》

黄太郎のパリ

作家と初めてお会いしたのは、二〇〇三年一〇月、梅野記念絵画館の企画展「北欧の風土と心を描く」でのギャラリートークの会場であった。ネクタイをきりりと締めた神経質そうな長身の紳士である。

三岸黄太郎の作品に出会ったのは今から半世紀前のこと。初期の茶褐色の静物画シリーズ時代である。彼が三〇代の頃は、抽象画旋風が日本中に吹き荒れ、抽象画全盛の時代であった。しかし、彼は一貫して具象画を追求していた。

第一回安井賞展（一九五七年）にも出品し、以後数回出品する。その数年後渡仏し、ブルゴーニュ地方のヴェロン村に住み着く。モチーフは一本の樹木、屋根、城壁、畑……。一見ぶっきらぼうで単純なフォルム、分厚いマチエールが美しい。洗練された透明な色彩は実に印象強い。

二〇〇九年一〇月、銀座高輪画廊で「三岸黄太郎展」が開催された。丁度伺った時は元気な姿で会場におられた。その二か月後、一月二十九日に訃報を聞くとは……。

金井徳重（長野県中野市）

三岸黄太郎 《谷あい》
油彩・キャンパス 72.8 × 72.8cm 1982 年頃



三岸黄太郎(みぎし・こうたろう／1930-2009年)
東京生れ。父は洋画家・三岸好太郎、母は三岸節子。1953～55年渡仏。兜屋画廊、大阪梅田画廊で個展。56年新樹会会員。昭和会展招待出品。東邦画廊、日本橋三越、日動画廊、高島屋等で個展。2009年没。79歳。

金子周次 《入港》

潮騒の音、海の香りが漂う作品群

一九九八年の夏、金子の作品に運命的に出会いました。没後二〇数年、閉ざされたままの状態で私の前に現れたのです。画家の孤独感と美に生きる人生観、金子が生きた時代の変遷、戦後の思想の戸惑い、己自身への矛盾と理想が、渾然一体となって私に語りかけてきました。画家が生きるという事の難しさを、彼は何時諦観したのか。描かれた美しい銚子の風景は、潮の匂いがしました。海は生命であり、母でもあることを強く感じさせます。以来金子の魅力に取りつかれ、少しずつ美術の世界に知られるよう顕彰を続けております。銚子の老舗の履物店の次男として生まれ、小学校時代から絵の才能を発揮した金子周次。後に世界的な版画家となった浜口陽三と机を並べ、画才を競ったといえます。戦前は家業のゲタ職人としての生活を余儀なくされましたが、戦後の混乱期に、絵描きとして生きることを決意し、生涯独身で木版画・油絵・水彩画・書・てん刻などの制作三昧の生活に入りました。周りの人々にはブタ小屋に住む貧しい絵描きと映ったようです。しかし、その作品は心豊かな郷土愛に満ち、純粋な人柄を彷彿とさせます。なかでも木版画には、先人の版画の亜流ではなく生涯をとおして試行錯誤を繰り返しながら創出したであろう金子独特の絵画的表現が見られます。版画というジャンルを離れて大きな意味での絵画的完成を求めていったのではないかと感じます。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

金子周次 《入港》

木版画・紙 45.0 × 63.0cm 1970年代



金子周次（かねこ・しゅうじ／1909-1977年）
銚子市生れ。1957年一線美術展入選。版画家・船崎光治郎主宰の「版画を創る会」会員。64年日本版画院展新人賞。大調和展に出品。生前の個展は一度だけであった。77年没。68歳。没後20年、松山庭園美術館で遺作展。

山縣 章 《蓮沼海岸》

気高き魂のうた

山縣章の作品に出会ったのは、二〇〇五年頃、成田空港に程近い富里のレストランであった。小さな水彩の風景が三点ほど。心地よい素朴な良さを感じた。その絵に会うため何度か足を運ぶうちに、絵は、すでに他界された近隣の画家の作品であると知り、ご家族に作品を見せていただくことになった。

アトリエは、期待にたがわぬ情感溢れる絵で満たされていた。ここは、無名の天才画家のアトリエだ。このまま埋もれさせてはいけない、多くの人にこの情感を伝えたいという思いが溢れた。

サラリーマンであったので生業のための絵は描かず汚れのない真に迫る絵を憚ることなく制作した。ひたすら描き、描くことの悦びにあふれた画家の絵は、何と豊かなことか。この格調の高さは作者の精神であろう。自然の風景の中にその人生を重ね、抒情深い。絵描きになりたかったであろう少年時代の絵の中にも並はずれた才能を感じた。

画帳に几帳面に整理された、長年に亙る日々の通勤電車の中で描けるように工夫した超ミニサイズの作品、ミクロ絵の世界も大きな広がり豊かな色彩に満ちて、その制作数は二万点に及ぶ。ミクロ絵を始めて以来、水彩画を描き続け、一九九四年（平成六年）第五三回創元展文部大臣奨励賞受賞、その年永眠、享年七七歳であった。

此木三紅大（千葉県匝瑳市）

山縣 章 《蓮沼海岸》
水彩・紙 38.0 × 50.0cm 1988年



山縣 章（やまがた・あきら／1917-1994年）
宮城県生れ。山倉克己に師事。創元展と日本水彩画展に出品。1984年水彩連盟に初入選。91年創元展準会員賞。93年創元展会員新人賞。94年創元展文部大臣奨励賞。94年没。77歳。

■ 福地敬治 《山村》

若き日に出会った豊かな感性

若い頃に感銘を受けたものは、生涯にわたって影響を及ぼすように思う。一九八〇年代はじめ、毎年のように個展を開いていた福地敬治との出会いは忘れがたい出来事であった。個展の案内状にはよく、パリに滞在していた当時の興味深いエピソードが綴られていた。画家仲間との交友や馴染みのパン屋の爺さんのことなど、その思い出は作家の心のふる里を思わせた。文章に滲む情感は会場に並んだ絵の雰囲気と溶け合い、展覧会の印象をより深いものにした。個展会場の作家は寡黙であったが、発するひと言に相手への気配りとやさしさがこもっていた。その細やかな心遣いと作品から感じ取れる豊かな感性とが二重映しになり、絵に対する信頼がいつそう増すのだった。どんな小さな作品でも、真剣に取り組んで描けば後々見ても見応えがある筈と、作家は日ごろ説いていたと言われる。細部にまで神経の行き届いた作品はその言葉に裏付けている。福地敬治の絵は、彼が愛したひとつの世界を窺わせる。絵に込められた詩魂は、静かな感動となって人々の心に生き続けるに違いない。遺された作品は、自分自身の宝を心に抱き、それを慈しみつつ磨き上げていくことの大切さを、画家の遺志として告げているように思われる。

棚橋章（千葉県松戸市）

福地敬治 《山村》

油彩・キャンバス 38.0 × 45.5cm 制作年不詳



福地敬治（ふくち・けいじ／1930-1997年）

大阪生れ。1955年大阪市立美術研究所修了。56年春陽会研究賞。68年春陽会会員。69～71年関西女子美術短大専任講師。69年渡欧、通算7年。パリ市立美術研究所修了。銀座美術ジャーナル画廊、三越本店等で個展。97年没。66歳。

■ 駒井哲郎 《笑う幼児》

もつとも簡潔な幼児像——私のコレクション事始め

この銅版画ほど簡潔、かつ的確に幼児をとらえた作品があるだろうか。とくに口と舌のとらえ方は絶妙である。いまにも無邪気な笑い声が聞こえて来るようだ。「頑^{がんせ}はない子」という表現が、ぴったり当て嵌まる。

この画は一九七三年、駒井哲郎五三歳の作品、死の三年前に制作したものだ。この前後、《街》《魔法陣》《流れ》など、面白い作品も多く、まだ周囲を冷静に観察する余裕があったのだろう。自分の死を意識した最晩年の傑作、《丘》《岩礁》《樹木》《影》など、四季シリーズとは対照的である。これらの作品群からは、鬼気迫る印象を受け、いささか息苦しい。私個人としては、それ以前の《笑う幼児》に魅かれる。

私がこの銅版画を求めたのは、一九七五年の早春であった。三五年以上も昔のことである。同時期、二見彰一氏の《やわらかな闇》も求めた。絵画をはじめ、芸術など全く無関心な無骨者の私にとって、余りにも、ささやかなコレクションの始まりであった。

私は端午の節句が来ると、この画を眺めながら柏餅を食す。そして番茶を一杯。

鈴木正道（千葉県柏市）

駒井哲郎 《笑う幼児》

シュガーアークアチント・紙 19.8 × 20.1cm 1973年



駒井哲郎（こまいてつろう／1920-1976年）
東京生れ。銅版画家。1942年東京美術学校卒。
戦後ルガノ、サンパウロ・ビエンナーレで受賞。
春陽会会員。72年東京藝術大学教授。長谷川潔、
浜口陽三と並ぶ銅版画の先達。夢と現実を結ぶ
文学性の高い作品を制作。76年没。56歳。